

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

B. 円滑な学位授与の促進

①複数教員による多面的な指導体制の整備

《医療系》

●熊本大学医学教育部

「臨床・基礎・社会医学一体型先端教育の実践」の事例

(具体的に何を実施したのか)

各指導分野が、演習と実験を重視する「実践 I」及び実習を重視する「実践 II」を研究指導科目として開講し、さらに臨床指導科目「実践 III」を複数指導分野の協力の下に開講するカリキュラムを構築した。大学院学生は、専門分野の「実践 I」に加えて、異なる指導分野の「実践 II」もしくは「実践 III」を選択履修することができ、臨床・基礎・社会医学領域横断的な研究指導を実現した。また、代謝・循環情報医学と発生・再生医学に関係する 22 の研究プロジェクトを予め設定し、異なる分野の大学院学生をリサーチアシスタントとして採用し各研究プロジェクトに共同参画させた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

リサーチアシスタントは、早い時期に異なる研究分野を体験するために、入学後 6 ヶ月を経過した 1 年生もしくは 2 年生として博士課程に在籍する学生を対象とした。公募に際しては、応募者が所属する分野とは必ず異なる研究プロジェクトを選択させ、異分野の研究に参画する意欲をもとに合同プログラム運営委員会において書類選考した。プロジェクト参加終了後には成果報告書を提出させた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

平成 20～22 年度において、全履修生のうち 21%が研究テーマに応じて異なる指導分野の実践科目を複合的に履修した。特に平成 22 年度入学生については 4 人に 1 人が異なる指導分野の協力体制による研究指導を受けており、臨床・基礎・社会医学一体型の組織的・実質的な研究指導体制が実現した。平成 20～22 年度に延べ 121 名の大学院学生がリサーチアシスタントとして採用され、異分野の研究プロジェクトの研究補助者として、論文抄読会への参加、研究打ち合わせ会への参加、実験補助業務などに従事した。大学院学生が異分野の研究活動に触れ、新しい知識・技術を習得し、人とのつながりを築くことを促進するうえで大きな効果があった。また、代謝・循環情報医学と発生・再生医学を広くカバーする領域横断的な大学院教育の実践により、大学院学生が代謝循環・発生再生医学関連の学術雑誌等に発表した論文数は、42 件(平成 20 年度)、104 件(平成 21 年度)、107 件(平

成 22 年度)と著しく増加している。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

E. 学習・研究環境の改善

②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

《医療系》

●熊本大学医学教育部

「臨床・基礎・社会医学一体型先端教育の実践」の事例

(具体的に何を実施したのか)

大学院学生の学術集会における研究発表を奨励するために、代謝・循環情報医学及び発生・再生医学に関連する国内学会もしくは国際学会に参加し研究成果発表を行うための交通費及び宿泊費の支援を行った。また、代謝・循環情報医学もしくは発生・再生医学に関連する医療・研究等を行っている海外の医療・教育・研究施設等へ大学院学生をサマーフェローシップとして1ヶ月程度派遣し、海外の研究グループとの共同研究等に参加させた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

学会での筆頭演者としての口頭あるいはポスター発表を単位として認める演習科目「医学・生命科学演習」および「発生・再生医学演習 III」を設置し、大学院学生の学会発表を奨励した。交通費・宿泊費の支援に当たっては、博士課程の大学院学生を対象に広く募集を行い、研究の意義等をアピールする申請書を提出させた。合同プログラム運営委員会において書類審査を行い採否を決定した。派遣終了後にはレポートを提出させ、他の大学院学生にも参考となるよう、国際学会発表とサマーフェローシップに関するそれぞれのレポートは教育プログラムのホームページで公開した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

平成20～22年度において、合計64件の国内学会発表と27件の国際学会発表について支援を行った。大学院学生が全国的あるいは国際的な舞台上で自らの研究成果を発表する意欲を醸成し、それを実際に経験させることで、研究に対するモチベーションの昂揚に大きく寄与した。また、英国及び米国の医療・教育・研究施設に対して4件のサマーフェローシップ派遣を行った。共同研究プロジェクトに関する実験の実施、講義や研究室カンファレンスへの参加、臨床研修プログラムへの参加などを通して、大学院学生がグローバルな視点を獲得し、研究・医療活動のモチベーションとスキルを向上させることに貢献した。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

E. 学習・研究環境の改善

③昼夜開講、休日開講などによる社会人学生等への履修上の配慮

《医療系》

●熊本大学医学教育部

「臨床・基礎・社会医学一体型先端教育の実践」の事例

(具体的に何を実施したのか)

社会人学生、遠隔地学生、外国人留学生および出産・育児等により日中の講義に出席できない学生への支援として、eラーニングシステムを構築した。講義のビデオ収録を実施し、パワーポイント・スライド原稿と組み合わせたオンライン教材を作成し、WebCTによるオンライン受講が出来るようにした。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

理解度チェックのための小テストの挿入やレポート等の提出により、オンライン受講が実質的・実効的となるよう配慮した。また、eラーニングコンテンツの完成状況や履修方法などを医学教育部のホームページに掲載し、さらには、eメールで通知するなどして、eラーニングシステムの利用を促進した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

平成21～22年度に実施した博士課程の講義・演習科目について、全コマ数779のうち301コマ(39%)がeラーニングを利用(併用を含む)して実施された。大学院学生へのアンケート調査(回答率73%)の結果において、39%の大学院学生がeラーニングシステムを利用しており、94%の大学院生が「eラーニングは有意義である」と回答しており、eラーニングの必要性和実効性が認められている。